「点と線」

今年は松本清張没後 30 年にあたることから、この機会にはじめて彼の作品を読もうと決心した。昔から推理小説は好きだったが、松本清張の作品はなぜか抵抗があり、この歳まで読む機会に恵まれなかったのである。

この作品は推理小説のジャンルでいうと「アリバイ崩し」に相当する。警視庁の三原警部補が、福岡でおきた心中を偽装された殺人と見破り「アリバイ崩し」に挑んでいく。その時に活躍するのが列車の時刻表である。三原警部補はこの事件の犯人とおぼしき人物が、事件当時に北海道にいたという鉄壁のアリバイを、時刻表や関係者の証言などから粘り強く見破っていく様子に私は大いに感心させられた。

このように犯人の「アリバイ崩し」に時刻表を用いる手法は、西村京太郎の作品でよく使われており、テレビドラマにおいても、十津川警部が犯人のアリバイの謎を解く場面はおなじみである。そういった意味でも松本清張という作家は、トラベルミステリーにおける先駆者的存在であったといえよう。（ちなみにこの「点と線」が発表されたのは 1958 年、西村京太郎がデビュー作「黒の記憶」を発表したのが 1961 年である。）

またこの西村京太郎が亡くなったのが今年の 3 月であったことから、私が松本清張の作品にはじめて触れるきっかけになった、この「点と線」という作品に今年出合ったことは、なにか不思議な因縁を感じている。

「点と線」　松本清張　/　新潮社　ISBN978-4-10-110918-3